

報



會

會 岳 山 本 日

41

月 二 十 年 九 和 昭

故辻村伊助と善光寺名所圖會

小 島 鳥 水

嚮に「山岳」誌上(第二十九年第一號)「上高地は神河内が正しき説」を述べ、「この一文を故辻村伊助君に捧ぐ」と添え書きした關係上、別刷一部を、令兄辻村常助氏に呈したところ、常助氏から、禮狀を寄せられた、その中に、故伊助氏が、未だ登山など思ひも寄らなかつた少年時代に、早くも「善光寺名所圖會」を繙讀してゐられたことを、懷舊談として書かれてあつたのは私の心を動かした、何故と言つて、その名所圖會から「神河内」なる正名(と私共が信ずる)の證據が擧げられ、故人が斷然愛好せられた地名が、復活して、文獻的に權威を持つて來たことを考へると、偶然でもあり、又不思議な因果關係が纏はつてゐるやうに思はれて仕方がない、その故を以て、私信を公示しては失禮ではあるが、常助氏の一文中、こゝに轉載させていたゞくことにした。

拜啓陳者「上高地は神河内が正しき説」御惠贈被下、雖有耽讀仕候、且又伊助の卑見に對し、深大なる御支援を辱ふし候段、瀦りなき御友情の程、しみじみ感じ入り申候。

現今、都會の低きよりして、天界の高きに憧る、時、上高地の名、一概に斥け難くとも思はれ候得共、凡そ地名が、現地に據つて、命名せらるゝの大多數なるを稽ふれば、仰の通り高地に非ずして、河内を正しと爲すべき點、御高見一々首肯致され候河上の、白木綿、花に落ちたぎつたぎの河内は、見れど飽かぬかも伊助の愛誦致居候古歌にも、河内と云へるは、水邊の地に有之、旁以て御高説と全く符節を合せ候。

續ては、御引證の「善光寺名所圖會」小宅にて、持ち傳へ候ものは、赤柿色の表紙と、記憶罷在り、他の名所圖繪など、共に、嘗て小田原の舊宅にて、年々蟲干を、夏の行事と致候其頃、團扇片手に寝ころびながら、伊助共々、拾ひ讀みしたる事を思ひ出で候、未だ若年の事とて、何の目的も無く、あれ是れと見散らしたるだけに候得共、今回神河内の出典を承り、偶ま往時の記憶に觸れ候ては連れ立ちし野中の路を、隔て、遠くふり顧る心地も致し、追慕の情轉た胸に迫り候、御發表により、世間の蒙を啓き、併せて神境の由來を説破遊ばされ候御事、斯界の爲、眞に大慶に存上候。

先は御厚禮旁、懷舊申上候、敬具。

(以上小島宛、辻村常助氏書信)

第四次エウエレスト遠征隊の裝備

おなじヒマヤラへのエキスペディションでも、隊員が十六名の多きに上り、目指すは世界の最高峯、しかも前三回の試登のあとを受けて必勝を期し、一萬一千磅乃至一萬三千磅といふ尅大な豫算を計上して取掛つた昨一九三三年のエウエレスト峯遠征は、その裝備などもチト桁が違ひすぎるの感がないでもないが、中には參考になるやうなものもあるし、またどんな道具を用意したかといふことを知るだけでも興味深いものがあるから、近著の『ラットレッツ著エウエレスト・一九三三年』に據つて裝備の一端を窺つてみよう。

先づテントは研究に研究を重ねた結果縫製人の「MEME(蒙古地方に行はれる原始的な小屋掛け風のもの)」とラットキャンスが北極探検の折に使つた極地用テントと折衷したもののが考案製作された。材料は特殊な防水布八角形で蠟蝟傘の骨のやうな彎曲した八本の支柱によつて支へられる。寫眞によると「メモリ傘の柄を除いて伏せたやうな格好である。支柱は運搬に便利なやう二分する。布地の部分はすべて二重、グランド・シート一枚は縫付けにして、更らに一枚別のシートを敷く。紐で編んで閉める出入口、雲母で作られた窓二つ風向きによつて方向を變へ得る通風口。支綱のほかに、テントの裾に、雪や石を載せて尙ほテントを緊りさ

内 容 目 次

- 故辻村伊助と善光寺名所圖會……………小島 鳥水…一
 - 第四次エウエレスト遠征隊の裝備……………藤島 敏男…二
 - 新理事選任通知
 - 研究 關
 - 臺灣に於ける山旅の準備に就て……………田中 薫…三—四
 - 山 の 消 息
 - 京大旅行部の計畫……………四—五
 - 富士山の遭難報告……………五—六
 - 會務報告……………六—七
- 來年の山日記編輯につき
 山小屋、山案内、登山團體の内、訂正増補致すべきところを至急御通知下さらば、編輯者は大變好都合であります。

せるために、餘分の布を縫付けてある。收容量、六人が樂々と寝られるこの極地用テントは三つ用意され、第四キャンブ(高度二二・四〇〇呎)まで使用されたが、非常な好成绩であつたといふ。

ボーター用としては、所謂ミードテント(屋根形)の外に十四人を收容し得る圓錐形テントが用意された食服用テントは十六人用のもの、三分される木製の食卓に疊込の椅子、給仕の控室まで附屬してあるといふから随分大きなものらしい。

飛行機の翼に使用する布で作つたミード・テントも幾張か準備された十封度乃至十五封度といふ軽量な點はい、がエグレストの風や雪に對しては聊か手薄であつたと報告されてゐる。

通風に關して特に留意し改良を加へたミード・テント三張は上方のキャンブのために用意されたが、成績は上乘であつた。

火急の場合——例へばボーターが動けなくなつた時——のために極はめて軽い天幕も製作された。

登山靴に就ては従前の遠征に於て隊員の多くが凍傷に悩まされた事實があり、慎重に考察されたが、登山の經驗ある靴屋が、底を二重にして間にアスベストを挿入し、紙は上底に及ばぬやう打ち、靴の内部にはフェルトを縫付けたものを考案製作した。特別なクリンカーを、重さを減じるため、ウント間を置いて打つた之も結果はよかつた。

チベット通過中、及び第三キャンブまでの氷河用として特別な靴も若干作られた。尙この外、例の「*Qinghai*」などの靴も用ゐたやうである。

キャンブ滞在中の使用に當るために作られた、羊皮で内部にウールを縫合はせた、膝までもある長い靴も大變具合がよかつた。

雪眼鏡はオレンジ色のもの、鼻や顎を保護するマスクに眼鏡をはめ込んだものが好果があつた。

アイヌ・アツクスマクランボンは英國では作らないので、メンバーの一人が塊太利へ買出しに出掛けて、*Orskow's* 商店その他で求めた

何本爪の克蘭ボンといふやうなことは分らない。メンバーは日頃愛蔵のビツケルを持參に及んだが、ボーターのも忽せにはしてゐない。

寝袋はバインズ(マンチエスター)とシルバー・エンド・エディントン(ロンドン?)との製作に係る。羽毛入の袋を二つ重ね、さらに木綿防水布の袋を重ねるもの。尙、エーガー會社から獨特の寝袋十四個が提供された。又ボーターの倒れたやうな非常時のために、三人の間が、テントなしに野天で寝られるといふ驚くべき寝袋も考案された。

ウインドブルーフの着物は所謂、「*Greenfell*・*クロス*」のもの、前記極地用テントと同じ布で作つたものと二種を用意した。前者は會員松方君が持ち歸つたので實物について見るに如かず、之もすべて布は二重、想像以上保温に役立つた

の、やうである。ボーターのために充分な防風のオーバオールを作つた。下着、ブルオーバー、靴下の類はウールの薄手のものを重ねるのが、厚手のものより効果が、といふ方針で購入された。手袋はどうも難問題らしく、正確なステツプ・カッティングのために餘り厚はつたものは不可だし結局、スキー手袋のやうな格好で、薄一枚、一番外部に羊皮製の少しゆるい目の一枚、占めて四枚重ねるのが最もよからうとある。

ゲートルはジエネラル・ブルースがカシミヤから招來した粗織のウール地が温くて、足を締めつけず、大層具合がよかつた。

クレス渡りの梯子、氷壁登攀用の繩梯子、木製中空のビトンや杭、*Bible*のアルバイン・クラブ・ロープ二千呎、*Bible*(リパブル)製ロープ二千呎等も持參した。ノース直下の急壁には一千呎に及ぶ固定網が必要であつたといふ。

酸素吸入器を持つてゆくかどうかといふことは、今次の遠征に於ても大問題であつたが、結局持參と決定し、前回使用のものに比して遙かに輕量(一箇二・七五封度)のものが製作され、一九二二年、一九二四年度のメンバーよりも大いに榮をした。

他の科學的裝備は極めて簡略にして、アネロイド晴雨計、最高最低溫度計、望遠鏡等に限つた。樹木が少なくて、しかも宗教上のタブーによつて之を伐らない西藏での燃料は確かに難かしい問題である。その國での主要燃料であるヤクの糞の乾したやつは食物や飲料に何とも言へない臭氣を移すといふ。用意された燃料はメタ百十二封度。プリムス・ストーブ用として燈油、これにパラフィンと輕油をミックスしたものは二五七〇〇呎の高所に於ても素晴らしい成績を上げてゐる。炊事道具はアルミニウム製。標準型の活動寫眞機は割愛して、メンバーの二三が十六ミリを持つていつた。殆んど全隊員が各自のカメラを携行、材料はシネ・フィルム、フィルム・バック、ロール・フィルムはイーストマン・コダック製、パシクロ乾板と、シネ・フィルム若干はイルフォード會社製。隊員の一人ロングランドが大骨折で旅行中の慰安のために鈔からぬ書物を選んで携行した。ラヂオの器械を持つていつたのは既に他の遠征隊の試みたところであるが、エヴェレスト・エクスペディションでは始めてである。これがダシヨンを通じてアリポア測候所から、モンスーンの移動状態を知るに役立つことは非常なものだ。第三・第四キャンブ間に敷設するための電話器具も用意した。これに高度二二四〇〇呎の第四キャンブからのニュースが第三キャンブ、ペースキャンブ、ダシリン、カルカッ

々と轉送されてロンドンのテリー・レグラフ紙の編輯室まで六時間内外で届くことになつたのだ。食糧品はすべて鍵のかゝる木箱に第三キャンブまでのものは約四〇封度、ノース・コルまで擴ぎ上げるものは三〇封度を目安として詰め、番號を附し、一見して内容を判明し得るやう色で目印をつけた。

まあ大體これで荷造りは出來た。あとは食料品の細目だが、口にしたことも、見たこともない代物もあるらしいし、飛んでもない取違ひを仕出かさないものでもないから、こゝでは觸れずにソツとしておく。

(圖書室にて 藤島敏男)

山岳第二十九號第三號報告

本欄

ウエストン氏と歩んだ頃の思ひ出 浦口 文治

アルバータ遠征の追想(二) 三田 幸夫

雜錄

スノワドンの思出 田中 薰

一月の日高山脈札内川上流 相川 修

上信國境御飯岳四阿山縱走 角田 吉夫

大平名譽會員壽像建設計畫 高頭 式

鹿島槍に於ける遭難報告 高頭 式

屏風岩に於ける遭難報告 高頭 式

圖書紹介

十二月下旬發刊の豫定 會報

山岳三十年第一號の原稿募集切 一月末日。

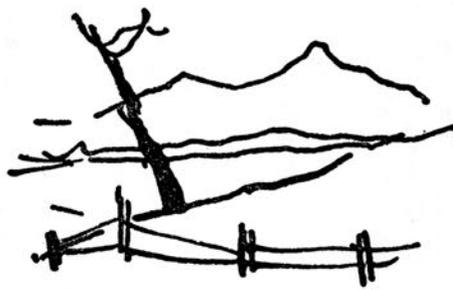
新理事選任通知

明年度理事改選に際し、改選せらるべき理事五名に對し役員總會より同数の理事候補者を推薦致し十一月月中旬各位に御通知申上げ各位よりの候補者推薦を待居候處締切日たる十一月末日迄に御推薦の向無之改選すべき理事の數と同數と相成申候、從て誠に役員總會の推薦したる五名の理事候補者は會則第十二條並に細則二の(ト)に據り投票を行はずして當選、明年一月より就任せらるゝ事に決定致候

新任の五氏(別宮眞俊氏、磯野計藏氏、櫻井信雄氏、田口一郎氏、森田勝彦氏)は何れも深き經驗を有せらる方々にて本會今後の活躍見るべきもの有之と被存候、何卒會員各位に於かれても倍舊の御支持御後援賜はらんことを奉懇願候

尙各理事の事務分擔は決定次第會報誌上に御報告可申上候
右不取敢御通知迄 敬具

昭和九年十二月
日本山岳會役員總會
會員各位



研究欄

臺灣に於ける山旅の準備に就いて

田中 薫

内地では何處へ行くのも大抵同じでしやうが臺灣の山は大分勝手が違ひます。此の點多少心得てゐないと何んでもない事に腹を立てればならぬ様な事はあります。以下私の狭い見聞の範圍で其の要領を述べて見ませう。

一、入審許可其の他

臺灣の山は大部分、總督府警務局の監督の許に置かれた特別警察行政區域であります。だから謂はば我々は警察官にお願ひして山を見させて貰ふと云ふ建前で山に登るのです。岩と自分と取組んでその間に如何なる不純物をも許容せぬと云つた様な學

生登山氣質は今のところ遠慮せねばなりません。

で、此の特別區域即ち蕃地に入るには、那警察部に出頭し、登山日程を示した上で入審許可證と云ふパスポートを受けるのです。此の證には「生命を保證せぬ」旨明記してあります。が實際は全力を盡して我々の身を保護して下れるのです。旅行の範圍が幾つかの州に跨る時は豫め他の州の警察部にも出頭して置かねばなりません。相當大規模の旅行であつたら最初臺北に於て警務局に出頭し、旅行の目的、希望のプランなどを述べて便宜を得んことを乞ひ、双方合議の上で無理のない日程を作る可きです。そうすれば警務局から各地の機關へ通牒が行きますから別に入審許可證の交付を受ける必要がなくなる事もあります。その代り豫め樹てた日程によつて總ての手配が出来てゐるのですからよくよくの事になければ日程を變更する事は出来ません。

此は實際窮屈な話ですが當局に對して餘り官僚的だなどと不平を云ふのは結局此方の認識不足でもあり、又、所謂エクスパティションの困難をわきまえぬものとも云ふべきです。同時に山岳人の我儘にも無理からぬ處があるので、兩者の間に立つていゝる、斡旋の勞をとつて下れるのが臺灣山岳會の一つの親切です。同會は總督官房文書課内に事務所を置き臺北帝大總長幣原坦氏を會長とし、常務理事沼井鐵太郎氏、登山係千々

岩助太郎氏等の如き熱誠の士があつて、内地の純な山岳人の氣持を呑込んで其の便宜をはかれてゐることであるからそのお世話になるのがよいと思ひます。因に同會からは「臺灣山岳」(年刊)臺灣山岳彙報(月刊)が出てゐます。

二、登山具以外の必要品

内地の登山家には思ひも寄らぬ品で必要なのは第一が名刺です。それも五枚や十枚では駄目で、平常持ち合せない人は肩書附きのを百枚刷らせて持つて行かねばなりません。臺北で打合せに四五枚、入審の時四五枚は必ず入用です。蕃地では駐在所の世話になる毎に必ず二三枚はいります。若し名刺を交換して置かないとあとで何十人と云ふ人に禮狀を發送する時まごつきます。

第二は小錢です。

十圓札でも持つて入らうものなら錢のために旅程を變更せねばならぬとも限りません。それは蕃地の交易所(我々に取つても唯一の物資供給所)ではあまり現金を扱はぬので釣錢がないことと、蕃人一人一人小錢で日給を支拂はねばならぬからです。で、二十日も山に入らうと思へば五十圓位は十錢や五十錢で持つて行かねばなりません。

三、服裝

帽子は登山帽でも良いがヘルメツトが良いとしてあります。日射に對する用意以外に此は木の枝などに打たれる時安全です。急雨にも堪えて便利なものです。

洋傘は登山家はその携帶を一應はじんでせうが、郷に入つては郷に従へと云ふ意味で矢張り必要です。蕃地の警察道路を長歩きする事は沛然たる雨に對して何も防水外套だけでしのぐ必要はありません。杖にもなる大夫なものを持つて行くことよろしい。

ズボンに脚絆と半ズボンとを一續きにしたり、よく請負師が穿くあの型のものが一般に行はれてなり、半ズボンに日本式の脚絆を穿く事も警察官の間では普通です。ニツカーにゴルフホースでも差支はありません。要は脚部を充分に保護するにありませう。それは臺灣の高山では刺のある植物が大變多いので此にさされて歩けぬ事があるからです。現に脚絆でも薄いものだと此を透して刺され、刺を抜くのに苦心した例もあり、この跡が化膿して困つた事もあります。従つて臺灣であるからと云つて無暗に薄地のものでズボンを作るのは考へもです。厚い巻ゲートル等は此の點で推稱出来るものです。併し又警察道路を歩いてゐる事は暑い時には膝がむれる様な氣がするので思切つてシヨーツを用ひるのは確かに得策でせう。

靴は立派な警察道路ではネールドブーツ等重いだけで役に立ちませんから普通のハイキングシューズで本當の山靴を取り出す方が賢明の様です。私はテニス靴で通した事もありますがそれでも済まされます。山

の警察官は灰色麻製の詰襟服、半ズボン、紺の脚絆、ハダシ足袋と云ふ身装です。本島人の用ふる臺灣ソラジもよいものです。

先づ普通の登山用上衣、ズボンを用意し、警察道路を歩く間は暑いからスポーツシャツ一枚ですすのが一番でせう。

四、食糧品

臺灣の特産物で山によいのは米粉(ビーフン)と豚デンプ(マフウ)でせう。米粉は米の粉で作つたウツドンの一種で、干餛飩と同様に處理してパタを加へ、焼肉など交せて焼けば鍋焼餛飩の類が出来、高山上で、米飯の甘くたけぬ時など、此に代つて遙かに美味であります。豚デンプは輕くて焼海苔、佃煮等と同様長き貯蔵に堪える良い副食物であります

他に肉類として支那料理の焼豚肉(チャシユウ)堅いイタリヤ風サラミー、干肉など成る可く堅いものを用意するが良く、内地から遙々持つて行く物は氣候の關係上餘程注意を要します。

五、藥品

アムモニア、キニネ、チアスのワグチンなどは特に必要のものでせう。毒虫に喰はれたら直ちにアムモニアを塗つて置くこと。マラリアは全島から殆んど驅逐され、現今では紅頭嶼にでも行かれば驅逐心配はないと云はれてゐますが部分的にはその危険は一掃されてゐる譯でもない様です。チアスなどの人はキニネを必要とするでせう。チアスなどのワグチ

ンは總督府の中央試験所の製品を臺北で用意するのがよいでせう。此は山旅行に限つた譯ではありません。赤虫(恙虫)は東海岸の或る地方や其の他溪谷に沿つた處で部分的には多少の危険がある様ですが大抵は大丈夫、萬一、発見したら直ちに針かなにかでえぐり取つてあとへメンソレータムでも塗つて置けば良いとの事です。

毒蛇の害に就いては我々は初め大變神經質になつてゐましたが、蛇は人里に多く山中には却つて少いもので、二十日もの山旅でほんの二三匹見かける程度ですから夜道さえれば何んの心配もありません。

六、暮管用意

天暮のグラウンドシートは雨が激しいから是非必要です。夏季なら一萬尺以上の場所でも羽毛入りのシュラフザック一つで充分安眠出来る程度です。殊に蕃人の狩獵小舎を利用して焚火で眠るならシュラフザックの他には何も防寒具はいりません。特にマラリアの危険ある低山岳に野營する時には頭部を覆ふ小型の蚊帳が必要でせう。併し先づそんな場合はめつたにありません。

蕃人の狩獵小舎はそれが最近利用されなかつたものにも、蚤が澤山あつたので、それで蚤取粉が必要でせう。一番良いのはシユウラフザックにスツホリ入つて眠ることですが、蚤をその中に入れぬ様取り扱ひに注意せねばなりません。蕃人と同室に眠る事は蚤を貰ふから考へるものです。

暮營地から稍遠い處へ水を汲みに行かねばならぬ場合のために石油の空罐を一個用意し此に水を汲んで置く様にすると便利であります。別に臺灣に限つた事ではありませんが陸地測量部員がよくやる方法です。臺灣の山の様に残雪のない處では水が身近に得る事は相當困難です。

七、其の他

腕時計は革紐の當る部分に、アセモを生じ、人により化膿して困る事などありますから用ひない方がよいでせう。

寫眞フィルムは類は濕氣を防ぐ爲め嚴重な空罐に收め蕃人に持たせる荷の中に入れる時は大雨に遭つても差支ない様に荷の中心に捲き込んで置く様特に注意を要します。

八、容器の問題

蕃人夫の賃金は山歩きの時平均日當六十錢、普通警察道路に於ける荷物運搬は日當五十錢内外です。だから少し贅澤の様でも荷物は皆持たせ、我々は寫眞機とか探集用具とかだけ小型のリユックサックに入れて自分で持ち、仕事の能率を擧げた方が得策であります。蕃人は一人仲間から離れて行動するのを好まないで、寫眞機等一人に持たせ人夫の一行におかれて我々の身近く歩かせる事は實際中々六ヶ敷しい事です。

偕て荷物はみんな人夫に持たせるとしてこの容器はどんなものが良いかと云ふ事になります。彼等はタウカン(殆んど全島に通ずる名稱)と稱する麻紐製の背負袋に何んでも載せて背負ひます。で、リユックサックでも其の儘は決して背負ひませんから人夫用の大型リユックサックなど役に立ちません。又、取り扱ひに手加減を知らないから中味を毀される虚があるので先づ木箱が最も安全です。石油罐の外箱などは大きき丁度良い様です。又、中位の柳行李に防水布を貼つたもの等も悪くはありません。

男子一人の負擔力は約六貫でせう。高山上ではそれ以下です。内地の人夫よりすつと弱いと思ひます。此に反して山中の警察道路を歩くだけなら十八九の若い娘が驚く可き力強さを示します。彼女等は大きな山籠を一本の紐で額に支へ、よく十貫位の荷を背負ひ、手には麻糸を繰り、その上朗かに唄ひつゝ、スタスタと歩きます。此の場合には山籠に入れるから細い包物等も紛失の虞はありません。極く大きい荷物なら籠に入らないから麻の大風呂敷で包んで結び目を額に支へます。蕃地の出入口に近い處では本島人にテンピン棒を以つてかつかせるのが最も能率的であります。要するに彼等は夫々獨特のかつき方をするのでありますから容器はかつき易いと云ふよりは中味の安全を第一として選んだ方が得策です。

九、宿泊

蕃地には宿屋はありませんから駐在所に泊めて貰ふのです。それで夜具蒲團は勿論、浴衣、丹前位は用意されてゐます。宿泊は警察官の厚意に依るものですから常に感謝の意を

表し、謝禮金を置きます。此は身分により差別をつける可きものらしく凡そ最低二圓、高等官級は四、五圓以上との事です。大きな蕃社には交易所か又は購買部があります。交易所は蕃人との間に物々交易をなすところですが、米、罐詰類其の他日用品は大抵此處で手に入りますから米などをわざわざ蕃地外から持ち込む必要はありません。駐在所には本島人の警手其の他の雇人の家族がゐますから、洗濯は其の細君に安くしてもらふ事が出来ま

山の消息

- 京都帝大旅行部冬期白頭山登山計畫
- 十二月廿一日 先發隊(四名)
- 京都發(夜)
- 廿四日 惠山鎮着
- 廿五日 惠山鎮一胞胎里 本隊(七名) 京都發(朝)
- 廿六日 胞胎里一三池淵(人夫用小屋建設)
- 廿七日 胞胎里へ連絡 ベースキャンプ偵察
- 廿八日 午後本隊「三池淵小屋」に着き編隊を變へ四班に分つ
- 廿九日 三池淵より往復なし得る地點にベースキャンプを建設
- 三十日 一月三日
- ベースキャンプより更に第一キャンプ、第二キャンプを経て、一月一日第一班偵察を兼ね登頂、此の間各キャンプ間は各班により絶え

す連絡をとり、二日、三日は各班
登頂し猶ほ白岩、層岩に至り且頂
上直下の天池を偵察研究す
一月四日一六日
四日よりキヤムプを漸次引き上げ
六日全員三池淵小屋に下る
七日 三池淵に全員休養
八日 一班 胞胎里、惠山嶺、京城
を経て往路を戻る(十三日頃歸洛)
二班 一、二回キヤムプ(又は小
屋泊り)して農事洞に出で茂山を
經て清津府に至り汽船、又は汽車
(此の場合往路と同じ)にて歸還
(十五日頃歸洛)
人夫は十名一十五名使用(一月三
日即ち小屋建設運搬を終りたる時
約半数は歸らず豫定)
ベースキヤムプに於ける人夫は主
として炊事に従事しアドバンド
キヤムプ第一、第二には人夫を使
用せず

計畫備考
この地方は鮮滿國境の奥地のこと、
よく訓練された人夫を使ふ事は望
まれませんが、私達は出来る限り隊
員の自力に依り運搬、炊事等を處理
し科學的研究と最後の登頂を完成し
たいと考へてゐます。その爲に今度
の計畫は隊員を數班に分ちベースキ
ヤムプへ、更に頂上キヤムプへと萬
全を期して着實に歩を進めて行き、
物資の運搬と同時に常に新しい精銳
な隊員を繰出し得る仕組みになつて
ゐます。露營地は山麓胞胎里を去る
北方約四里の三池淵に人夫専用のオ
ンドル付き山小屋を建設、その先二

里半の地點に隊員のベースキヤムプ
を設置、更に進んで森林限界に第一
キヤムプ。これを中繼として頂上直
下に第二キヤムプを設け、一日にて
往復し得る此點にテントを設け、そ
の聯絡の遺憾なきを期し又無線有線
の電信等も考へてゐます。又天池そ
の他の冬期に於ける状態及び氣象學
的研究を遂行します。
冬期白頭山登山費豫算
(隊員拾壹名)
旅費 六七七圓
汽車(京都一合水往復) 三三〇圓
自動車(合水一胞胎里往復) 二〇〇圓
列車中雜費(食事通信等) 七〇圓
宿泊費(惠山嶺、胞胎里) 七〇圓
人夫費 三〇〇圓
一人一日 二圓(食料供給) 延人
員 一五〇人
糧費 一五〇圓
胞胎里一三池淵 一臺
一五 往 七臺 一〇五圓
復 三臺 四五圓
食料費 二二〇圓
隊員一日一人 一圓 十一人二〇
日分(人夫の食費は人夫費より支
出)
燃料費 二〇圓 ガソリン、メタ
寫眞費 七〇圓 普通寫眞のみ
荷造費 五〇圓
荷物送料 一五〇圓 汽車(京都一
合水) トラック(合水一胞胎里)
賭雜費 二〇〇圓
裝備具費 二一六圓
觀測器具費 五〇〇圓(氣象觀測器

具一式、寒氣に對する醫學的研究
用具)
合計 四四五三圓
參加遠征隊員
今西 錦司 動物擔當
西堀榮三郎 物理、化學擔當
高橋 健治 植物擔當
淺井 東一 醫學擔當
奥 貞雄 民族擔當
平吉 功 寫眞、植物擔當
長谷川清三郎 寫眞擔當
堀 龍雄 無電擔當
加藤 泰安 林業擔當
兒島 勘次 地質擔當
谷 博 醫學擔當
補缺學生 小野寺幸之進、岩橋清
次郎、杉山佐一

京都帝國大學旅行部の
白頭山冬期遠征への寄附
京大旅行部の白頭山遠征計畫(別
項參照)に對し、本會はこの遠征の
有意義にして、又本邦登山界にひと
つの刺戟ともなるべきをおもひ、遠
征費用の一端にもと金壹百圓を遠征
隊に寄附する旨十二月定例理事會に
於て決議し京大旅行部に送つた。

堀保美氏富士遭難顛末
武藏山岳會々員堀保美氏ハ十一月四
日雪中富士登行ノ目的ヲ以テ單身富
士吉田ヲ出發シタマ、消息ヲ斷チシ
處十一月九日午後三時ニ至リ痛シク
モ氏ハツバクラ澤ニ死體トナツテ發
見サレタノデアツタ。

遭難實情
武藏山岳會ハ十一月七日午前八時堀
氏嚴父ヨリ堀保美氏ノ搜索ヲ委囑セ
ラレタルニ依リタマ、チニ緊急理事會
ヲ召集シ協議ス。
堀氏ハ三日午後十一時五十分新宿
發四日五合目小屋一泊ノ上五日早朝
頂上ニ至リ同夜必ズ歸京ノ豫定ニテ
出發セシニ七日ニ至ルモ未ダ歸京セ
ザルニ依リ至急搜索ノ勞ヲ煩ハシタ
シト云フノデアツタ。
ソコ會デハ不取敢富士吉田町ミ
ドリ屋ニ對シ電報ヲ以テ問合セシ處
四日午後七時當宅ヲ出發シタマ、未
ダニ消息ナキ故當方アモ心當リチ搜
索中ナリシトノ返電ナリ。
東京ア搜索隊ヲ出スマテ何故地元
ニ於テ何等ノ通知ヲモ發セザリシ
カニツキ氏ハ發行ニ相等ノ自信ア
リシ故二日乃至三日位消息ヲ斷チ
シモ遭難セシモノト認ムルハ早計
ナリシト思ヒ東京ヨリノ問合セア
ルマテ事件ノ公表ヲ差控ヘタルニ
依ルナリ。

依テモシ堀氏が墜落シテ大澤デナ
キ事ヲ斷言セラレタ。
前以テ東京出發ノ途時吉田警察署
デハ厩橋警察署ノ搜索依頼ニ依リ御
殿場警察署並ニ大宮警察署ニ對シ搜
索方ヲ打電セシ處頂上觀測所ヨリノ
入電ニ五日早朝頂上ニ學生ノ姿只一
人認メタルモ直チニ下山シタル様ナ
リトノ報告ナリ。
六日ニハ五合目以上ニ降雪アリ二
尺。
七日入山中ノ帝大山岳部員ノ盡力
ニ依リ夏季登行路並ニ頂上附近ヲ搜

五日午前三時出發ノ豫定ナリシ故
起セシ處氣分惡キ申シ休ミタリシ
シテ四時再ビ起床サレ氣分幾分ヨク
レバト云ヒ食事(茶碗ニ一パイ)探
ラレシモ顔色惡ク今日ノ發行不可能
ノ状態ナリシト思惟シタレバ中止ヲ
勸告セシニ決シテ迷惑ハカケズト云
ヒ午前四時半單身出發ス。
此ノ日中大生ノ死體引降ノ爲池谷
ハ午前八時頃人夫多數ト共ニ五合目
ニ來リソシテ大澤ニ出發ノ途時田村
ヨリ堀氏今朝氣分惡クシテ發行セシ
ガ不安ナリシ爲注意スル様依頼サレ
タレバ池谷等ハ午前十時ヨリ作業シ
ナガラ大澤ニ居リタヘズ頂上方面ニ
氣ヲクバリナカラ午後三時頃マデ作
業ヲ繼續セシガ其ノ間姿ヲ認メズ不
安ノウチニ下山ス、此ノ日天氣靜穩
ニシテ眺望ヨシ。

搜索方法
池谷ハ病氣ノ爲田村勝治氏五合目小
屋ニ滞在セシニ堀氏ハ四日正午頃來
訪サル。
五日午前三時出發ノ豫定ナリシ故
起セシ處氣分惡キ申シ休ミタリシ
シテ四時再ビ起床サレ氣分幾分ヨク
レバト云ヒ食事(茶碗ニ一パイ)探
ラレシモ顔色惡ク今日ノ發行不可能
ノ状態ナリシト思惟シタレバ中止ヲ
勸告セシニ決シテ迷惑ハカケズト云
ヒ午前四時半單身出發ス。
此ノ日中大生ノ死體引降ノ爲池谷
ハ午前八時頃人夫多數ト共ニ五合目
ニ來リソシテ大澤ニ出發ノ途時田村
ヨリ堀氏今朝氣分惡クシテ發行セシ
ガ不安ナリシ爲注意スル様依頼サレ
タレバ池谷等ハ午前十時ヨリ作業シ
ナガラ大澤ニ居リタヘズ頂上方面ニ
氣ヲクバリナカラ午後三時頃マデ作
業ヲ繼續セシガ其ノ間姿ヲ認メズ不
安ノウチニ下山ス、此ノ日天氣靜穩
ニシテ眺望ヨシ。

依テモシ堀氏が墜落シテ大澤デナ
キ事ヲ斷言セラレタ。
前以テ東京出發ノ途時吉田警察署
デハ厩橋警察署ノ搜索依頼ニ依リ御
殿場警察署並ニ大宮警察署ニ對シ搜
索方ヲ打電セシ處頂上觀測所ヨリノ
入電ニ五日早朝頂上ニ學生ノ姿只一
人認メタルモ直チニ下山シタル様ナ
リトノ報告ナリ。
六日ニハ五合目以上ニ降雪アリ二
尺。
七日入山中ノ帝大山岳部員ノ盡力
ニ依リ夏季登行路並ニ頂上附近ヲ搜

索下サレシモ堀氏ト覺シキ者ノ姿發見セズ。

八日慶應山岳部員極力捜索ノ勞ヲ煩サレシモ姿認メズトノ報告ナリ。

依テ事情綜合推定ノ結果大澤ノ捜索ハ第二班ノ入山ヲ待チ不取敢第一班ハツバクラ澤ヲ詳細調査シ泉水、内山氏ヲ五合目吉田間ノ連絡係トシテ。

加藤、池谷、中村、清水、泉水、内山氏宇田川人夫駒谷、田村氏等五合目ニ向ケ出發ス。時ニ九時。

十時馬返着池谷(弟)ト會ヒ堀氏發行ノ際五合目小屋ニ預ケ行キンモノ取出サル。

コッフエル、シャツ等ナリ十一時午五合目小屋着晝食後出發ス。十二時天氣概シテ晴ナルモ六合目附近ヨリ北西風速十米ナリ夏季路ニ從ツテ登行ス六合五勺ヨリ積雪ノ氷化セル部分認メテレバ全員シユタイグアイセンヲ穿キ第一回ノ食事ヲ攝ル時ニ二時九合八勺附近ヨリ四十米左ニトラバースシ三〇米ノザイル二本ニテ池谷、駒谷、中村、加藤五十米置テ中村ト宇田川ノ順テツバクラ澤ニ下降開始ス二時雪質ウインドクラストコンテション良好三五〇米下降龜岩ヲ左トラバースシテ注置深ク下降續ク。

七合五勺小屋東一、二三〇米ノ處ニ至リ雪中ニ彼ノリツクサツク發見シ續イテ五米先ニ三糧位雪面ニ服ノ露出シテキル慘狀ヲ發見シタリ時ニ三時直チニ本部ヘ急報ノ爲池谷下山セシム、他ノ五名ハ協議ノ結果死體

引降ハ明朝ナリシ慎重ニ下ル中道路四時半五合目小屋六時此ノ頃ヨリ雲海亂レ風加ハル加藤、泉水、内山吉田ニ急行ス。

十日五時起床晴雲海アレバ概シテ靜穩ナリ七時ニハ加藤、内山、池谷(弟)檢視人磯部並人夫二名到着ス八時出發六合目附近ヨリ天候ヤ、グヅレ始ム中道路九時ツバクラ澤ハ蒼水部分ナレバシユタイグアイセンヲ穿キ登行ス始メハ歩行容易ナリシ故ザイル使用セザリシガ三〇〇米頃ヨリ急斜面(六十度)ナレバ歩行困難ナリシモ全員ノ努力ノ結果十一時現場ニ到着ス、直ニ三〇米ザイル二本ニテ全員アンザイルシ作業開始ス死體ハ緊雪中ニ在リシ爲ヒツケルニテ堀出シツダニテ包ミソイヤロープヲ巻キ作業終ル其ノ間二時間ヲ要スルホドノ困難ナル作業ナリ其レヨリ引降ヲ開始ス死體ハザイルニテアンザイルシ全員ニテ擔保池谷駒谷死體ノスリツブチアセグ爲附添ヒ三〇米ツ、下降ス中道路三時其頃ヨリ頂上附近風雲類ト巻キ直チニ丸太横ニテ一同遺骸ヲ護リテ山下下馬返着六時堀氏嚴父友人多数ニ出ムカヘラレ吉田ニ着ス、ソシテ吉田ニテ茶昆ニ附ス。

十一日午前九時二十分吉田有志多数ニ見送ラレ東京ニムケ出發ス一時新宿着一時半堀氏宅着ス。

後記

考フルニ此ノタビノ遭難ハ雪中單獨行ナリシ故ト出發ノ際登行ニハ不可能ノ狀態ナリシ事等ノ原因ナリシカ

ト推定ス。

前日中大生八合目附近發行中大澤ニ墜落セシ爲七合八勺ヨリ左ニツバクロ澤上ヲトラバース中スリツブセシカトハ十一月二十五日再ビ富士ニ發行中堀氏ガスリツブセシ時ビツケルニテジツヘルセシカト思ハルアトガ八合目小屋右ノ上ヨリツバクロ澤ノ中ニ一條アリタルニ依リ此ノ附近ガ確定ト思ハル遭難當時着用ノ上衣ヨリタムノ記録セシモノアリ其レニ依ルト七合目マデアリシモ其レ以上ノタムノ記録ナキ故ニ八合目發行中大事ニ至タルモノト考ヘラル死因ハ外傷及ビシヨツク。年毎ニ雪中富士登行ガ盛ニナリ本月ステニ四人モ遭難者チイダシ其内二人マテガ不幸ナ犠牲者トナリタルニ對シ大イニ冬季登行ノ研究ヲ深カラシメ斯如キ危険性多キ山岳ニ於テ無謀のナ登山ナカラシムル様希望シテマヌ次第デア

(武藏山岳會報告)

陸地測量部新刊地圖

二萬五千分一地形圖新版

山形近傍 三號 山寺 一面

同 五號 天童 一面

同 修正

小千谷近傍一號 三條 一面



會務報告

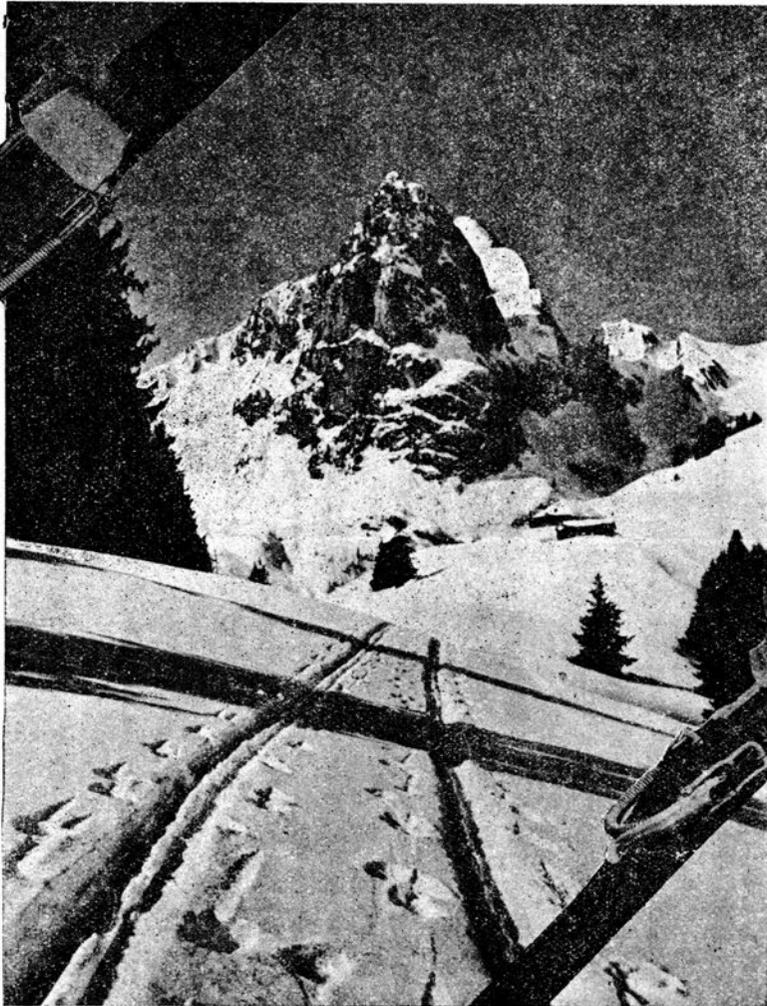
十二月定期理事會報告

十二月六日 於本會事務所

- 出席 高頭、小島、木暮、茨木、鳥山、横、松方、額田、神谷、逸見、三田、飯塚、藤島、黒出
- 一、事務所移轉ノ件
- 一、明年度山日記編輯委員ノ件
- 一、理事候補者決定ノ件
- 一、山岳第三號編輯ノ件
- 一、會員大會ノ件
- 一、京大白頭山遠征ニ金壹百圓也寄贈ノ件
- 一、關西國住理事ヨリノ提案ニ關スル件

以上

美津濃 オリンピック ビンディング



中欧スキーの
新傾向を指示す
る縮具です全金属
製スプリングの最
合理的な使用はス
キー操作に對し最
高の効果を與へま
す。従來スキー走
行上生じる皮縮具
の持つ不愉快なる
伸びより完全に逃
避し得られます。

¥ 4.00

フットフェルト
システムを合理
的に改善せるも
ので皮革部分を
極度に縮小せる
と共にビルドス
テキン縮具の性
能を有利に使用
した縮具です。

¥ 3.80

美津濃
クリスタリクス
ビンディング

ムルキ7ネシらくさ

度光感高超

圓十五圓九 映十五音 附像現

16

サクラグラフィ

家庭活動映畫の霸王!

Xマス及新春……

長夜のお集りには何より

お獎め申上げます

映畫目錄遊星



東京 小西六本店 室町